



三井家同族会議長一行の三池炭礦視察（明治35年11月）

口絵 三井家同族会議長一行の三池炭礦視察（明治三十五年一月） 三井鉱山株式会社蔵（原寸大）

明治三十五年一月九日、大演習觀兵式出席のため三井三郎助管理部会長（同時に三井鉱山社長）、団琢磨三井鉱山会社専務理事が九州へ向けて出発し、翌々一日には三井八郎右衛門同族会議長、有賀長文同族会専務理事心得が東京を立った。口絵の写真は、大演習觀兵式出席の後、三池炭礦を視察した際の同族会議長一行の写真である。ちょうどこの時期には三池築港の起工式（一月三日）が行われている。

三池築港は、三池炭礦の出炭増大と三井物産の石炭取扱量の増大とを背景に、石炭その他商品の搬出の渋滞をなくし、流通経費の低廉化を企図して、三池炭礦の払下げ年賦金を明治三五年に完納したのを俟って着工され、三十五万余円を投入して明治四一年に竣工、同年四月六日勅令第七十五号を以て同港は開港場に指定された。同計画は団琢磨の発意と指導のもとに遂行され、明治三五年六月六日の管理部会議において資金的裏付けを与えて決定されている。管理部会は同年四月一〇日に三井家同族会事務局の中に設置され、三井営業店重役会に代って、三井の全事業の統轄機関となり、のちの三井合名会社設立に連なるものである。この管理部の決定により一月に三池築港が着手され、他方でちょうど時を同じくして同月一六日駿河町に三井本館が竣工している（二一日に同族会事務局並びに各営業店が移転し、管理部も同館内へ移転した）。

明治三〇年代後半は、日本資本主義の確立を告げる時期であると同時に、三井財閥が不動の地位を築く過程でもあり、三池築港と三井本館の落成は、三井財閥成立の曙光を示す象徴的な事業であったと言える。

写真は最前列右側二番目より、牧田環（工務幹事）、岡本貫一（本店主事）、有賀長文、三井八郎右衛門、三井三郎助、団琢磨、山田直矢（三池炭礦事務長）、二列目右より三番目、岩田謙三郎（会計幹事）、（カッコ内は同時期の在職名）。